

## 執筆者

@短信

(テキトーな順)

國友万裕

新連載



**「マッチョになりたい!？」世紀末ハリウッド映画の男性イメージ** (彩流社)という本を7月に出版しました。初の単著です。おかげさまで、京都新聞、朝日新聞、北海道新聞、西日本新聞にとりあげられて、この種の本としては成功の部類だと言われました。次は何をしようかと考えていたところ、中村先生から、「今度は日本映画をやってみたら」とアドバイスをされました。で、日本映画をモチーフにした、ぼくの自叙伝的映画エッセイということでスタートさせることにします。ぼくの人生は、研究材料になりそうな変な人生ですが、ぼくは有名人じゃないので、自伝では誰も読みたがりません。映画とミックスさせれば、多少は読んでくれるかなあと思った次第です。どんどん映画とジェンダーについてのことを書きつづっていきたいと思っていますので、FACEBOOK に感想をお知らせください。

## 鶴谷圭一

昭和35年生まれ。両親が幼稚園をやっていたため生まれて50年幼稚園に携わってきております。あ、幼児の時は園児としてね。

マガジン執筆者でもある団遊君に手伝ってもらって、沼津市の幼稚園園長達と「おやこんぼ」という親子の絆を愉かに、強くするプロジェクトを進めている。毎月15日にテレビを消して、親子で何か楽しいことをして楽しみましょうよ！という簡単なプロジェクトだ。子どもがテレビのスイッチを消したくなるストーリーを考え、沼津市内の23幼稚園で4年間続けてきた。

その成果も少し実って、来年4月からは静岡県私立幼稚園振興協会も加わって静岡県下の各私立幼稚園でも「おやこんぼ」が始まる。沼津市約3,400人の園児から一挙に62,000人に広がる！といいんだけど、なかなかやってくれない園もあるんだよなあ。おやこんぼが全国に広がるのが夢です。ぜひ一度のぞいてみてください

～い！ おやこんぼ

<http://www.oyacombo.net/>

## 河岸由里子 (臨床心理士)

かうんせりんぐるうむ かかし 主宰  
先日、対人援助学会で京都に行った。その折、二人の友人と会う予定でいた。一人は学生時代から35年以上の付き合い、もう一人は5年くらいの付き合いで4か月前に結婚して京都に行ったばかりだった。行く前に連絡をと思って、まず、新婚の彼女に電話をした。中々つながらないと思っていたら、彼女はもう北海道に戻っていた。何があったのか？「夫が豹変する。怒ると乱暴になって、酷いことを言ったり、腕を強く掴んだり。でも翌日には土下座して泣いて謝る。だんだん耐えられなくなって帰ってきた。」とのこと。典型的DVタイプ。まだ殴ってはいないが時間の問題。せつかく新しい家族になったのにたった4か月で壊れてしまった。

さて、もう一人の友人は最近やっと離婚が成立したところ。結婚して30年以上の

夫婦だが、夫の浮気等が原因。二人の子どもは結婚したので、親権云々は問題なかったが、金銭面では揉めに揉めた。やっとスッキリしたと言っていた彼女だった。30年くらい前に訪ねて以来、久しぶりに家を訪ねた。昔話や、子どもたちの事、離婚の話など、一通り語った後で、彼女がボツンと言。「一人で居る事は楽やけど、東北の震災以来、テレビで家族の絆の話が度々流れるようになり、それを見るとかえって辛い。」

震災で無理に家族を壊された人々。家族は無事だったが仮設住宅の薄い壁では夫婦喧嘩も出来ず鬱積した結果、離婚に至ることも多いと聞く。

壊れる家族、壊れた家族、壊された家族、何の落ち度があったのか？家族を作り、家族を続けることの難しさを改めて感じた。

## 中村周平

先日、立命館大学でおこなわれた対人援助学会に行ってきました。「理事会企画ワークショップ「対人援助学」マガジンの可能性」にも参加させていただき、他の執筆者の方々と濃密なお話をさせていただきました。在学中に日々感じていたことでもありましたが、いろんな方々との出会いは、経験不足の自身にとって「他者の視点・考え」を学ばせていただく貴重な機会になります。自分だけでは絶対に見えて来なかったモヤモヤしていたことが、少しずつ晴れていくような。団先生、このようなワークショップを企画して下さい、本当にありがとうございました。今後も積極的に参加させていただければと思っています。

## 北村 真也 )

私塾「アウラ学びの森」(<http://tiseikan.com>) 代表。人間科学修士。

最近、コーヒーにハマりだしています。たまたま入ったコーヒー豆の専門店を試飲したコーヒーの味に魅かれ、思わずそのお店で焙煎した豆を買いました。そして1年の2/3はいい豆を求めて世界中を飛び回っているという社長のこだわりにもまた感動し、これまたフレンチプレス式の

コーヒーマーカーと臼式の電動ミルを手に入れ、いよいよ私もカフェ・アディクションの仲間入りです。

## 村本邦子

夏の屋久島旅行やローマ出張あたりまでご機嫌な毎日を送っていましたが、10月に足を挫いて1月近くも松葉杖生活をしていました。正直なところ、足より気持ちの方が挫けてしまいましたが、これも老いのレッスンと、秘かに松葉杖ファッションを楽しみ(誰も気づかなかったと思うけど)、左足ペダルでピアノのコンサートにも挑戦しました。ようやく少しずつ回復ですが、靱帯も足も弱っているので癖になりやすいとのこと、時々足を挫いてはぶり返しています。こうなると、これまで当たり前だった二足歩行がすごいことだと思えてきますね。再びジョギングできる日が来るのかしら!?

## 荒木晃子

生殖医療施設&精神科診療所心理士。立命館グローバル・イノベーション研究機構構成員研究員。

身辺整理を始めた。とくに人生の終末期を意識してのことではない。例えるなら、店じまいではなく、棚卸といったところだ。

この秋、初めて手掛けた「不妊をテーマにした家族シンポジウム」で(自分なりに)大役を果たした直後、初めてのバーンアウトを経験する。援助者によくある、燃え尽き症候群という現象だ。おかげで、ここぞとばかりに、長い間あと回しにしていた治療を終え、しばらく長期休養をとる機会に恵まれた。一瞬、活動するエネルギーは枯渇したものの、どうやら、これが、人生をリセットする絶好のチャンスとなったらしい。そういえば、これまでも、ピンチをチャンスに変えた事象を幾度か経験したことがある。もしかして、私は、生まれながらのサバイバーなのかもしれない。そう考えると、なんだか元気になる。これが私流、「自分を元気にする自己暗示法」かも。

## 尾上明代

この秋、京都で2シリーズ目の「ドラマセラピー連続セッション」を行いました。今

回は、「心の声にしたがってChange! ~変わることは怖くない~」というテーマで、対象は一般の方です。

異なった可能性・さまざまなオルタナティブを提案し演じあう実験場を創ることで、変えたいと思っていることを「現実的に」変える力を引き出したり、変わることそのものへの恐怖心を乗り越えることが目標でした。私たちの中にある共通の思い込み、ワンパターンの解釈やそれに伴う解決方法、ひいては、私たちの人生を制約する「ドミナント・ストーリー」に、多くのアイデアを使って新しい光を当てるワークをしました。ドラマの中で「実際に」いつもと違う行動することで、内面も影響を受けます。その変化・変容こそが「現実での自分」を変容させていく力になっていくのです。変化がどんどん参加者に現れるのを見ることができ、嬉しくてほっとしました。

## 木村晃子 当別町ケアマネジャー

~三角おにぎり~

午前中の訪問がやや長引いて時計は12時近くになっていた。その日は振替休日という小学生の恵美ちゃんが、自分の部屋から居間に入ってきた。「こんにちは」と小さな声であいさつしてくれ、ダイニングテーブルに座ると、布巾をはぐっておにぎりをつまんだ。「あ、今日はさんかくだ!」恵美ちゃんの顔がほころんでお母さんの方に向けられた。お母さんの里子さんは、母親である良子さんの介護者である長女だ。

里子さんは、少し恥ずかしげにケアマネジャーに話をした。「実は、私が子供のころ、母が握るおにぎりはいつも三角だったんです。私は、ずっと母に反抗していたところがあって、結婚して子供を産んでも、母に育てられたようには、子供を育てたくなかったんです。私の小さな抵抗はおにぎりの形にも現れて、私は普段は丸いおにぎりしか握らないんです。でも恵美は三角おにぎりを喜ぶ。お母さん三角上手、って。だから、時々、三角おにぎりを握るんです。私が母を受け入れられなくて握らない三角おにぎりを恵美が喜んで、私も上手に三角ができる。すこし皮肉です

ね。」そう言って笑った。恵美ちゃんの食べている三角おにぎりはとてもきれいな三角だ。葛藤を抱えながら母親を介護する里子さん、上手に握る三角おにぎりを誇っているようにもみえる。親子って…

## 団遊

今号からオリジナルの挿絵を連載の合間に入れることにしました。絵を描いているのは「高岡みなみ」と言います。私が代表をつとめるアソブロックという会社でアシスタントをしている女の子です。彼女は早稲田大学を卒業後、新卒で私のアシスタントになりました。入社の手続きは「なぜ働くのかわからない」と面接で質問してきたことでした。真剣にそのことについて考えていました。その後、私が「他社の内定を3つ取ったらうちも内定を出すから4つの中から行きたい会社に入社せよ」と言うと、「なぜ働くのか」に対しての答えが曖昧なまま、それでも活動をつづけ内定をもらってきました。行動力もあるのだとわかりました。「考える力と動く力」この二つが揃っていればポテンシャルは十分だと思いました。それから4年が経ちました。( 団遊 [www.danasobu.com/](http://www.danasobu.com/) / [twitter.com/danasobu](https://twitter.com/danasobu))

## 藤 信子

夏に London の 15th European Symposium Group Analysis に参加して、このごろは精神療法(主として精神分析の流れの)は、認知行動療法や行動療法などに押されていると聞いていたが、少なくとも Group Analysis(以下 GA)はまだ元気なのではないか、と思った。もっとも昼食の時に聞いた英国のグループ・アナリストの話では、CBT に押されている、ということであったが、44 カ国、33 言語の 500 名の人々が、朝のキノートレクチャーから、夕方の大グループまで熱心に、参加するのである。これまでの数少ない体験ではあるが、国際学会では夕方になると頭が英語でぎっしりという感じになって、時々観光に出かけたりすることがあったが、今回はそんな事にもならず、毎日せっせと参加した。GA という学派の集まり

なのだな、とあらためて感じながら、心理療法学ぶ場 - 協会や研究所 - についても考えた。理論と体験を重ねながら、自分の心理療法を見つけていくこと、という場面はまだ日本では少ない(この頃少なくなったのか)と感じる。自分の心理療法という姿勢を持つことについて考えた時でもあった。私は今中南米やアフリカにおける心的外傷へのアプローチに関心があるので、Cultures, Conflict and Creativityという今回のテーマも良かったのだと思う。

## 水野スウ

週いちオープンハウス「紅茶の時間」家主。石川県在住

あいかわらずはやっていない毎週のふつつ紅茶と、いろんなところへお話にてかける出前紅茶との二本立てで、あっという間に日々が過ぎます。マガジンの方がたがどんなお顔、表情、お声、話し方なのか、なまで拝見したいなあと思いつつ、みなさまが集う年次大会には予定が合わず、いまだその願いがかなわないでいます。

「紅茶の時間」は丸 28 年が経ちました。今回は、その周辺にあったワークショップ自主勉強会のことを書いてみました。毎回ですが、書きながら、新しい発見をいくつもします。まさしく題名通りに、「きもちは、言葉をさがしている」です。ここ 10 数年のいろんなかたちの学びが、あらたまって文章にすることで、私の中で再統合されていく感じが、とても新鮮です。

先日、あるパン屋さんの店内カフェに、4 時間という長丁場の、お話とワークショップの出前に行きました。お店はオープンしたままなので、ワークショップ中、ふつうにパンを買いに来るお客さんがいて、途中からいつのまに参加してる人がいて、早めに帰る人がいて、パン屋さん自身は、お客さんと会話し、レジ越しに話を聞き、ワークショップにも加わり、という感じで、まるでわが家のふつつ紅茶みたいな、ゆるやかにひとの動きがありながらの、初のパン屋さん紅茶の時間。

こんなふだん着感覚の出前ワークショップって、なおいいな。ワークショップもコミュニケーションの練習も、特別なことじゃな

くて日常的なこと、と思うひとがもっとふえるといいな、そう思わせてくれる場の空気でした。

それにしても、パンとお茶付きで参加費 500 円、って安すぎませんか？お店のもうけが何もなく、と心配したら、「いえいえ、うちはパン屋ですから、そっちのお代はいただきますません。それにこんな集まりをする、いつもみなさん、お帰りの際、パンをたくさん買っていただきますからね」ですって。かっこいい！

## 山本 菜穂子

私の中に、先輩、上司、同僚、後輩からのたくさんのことばが生きていると感じる。本編の中には、団さんからのことばがたくさん出てくる。まるで、「団教」の狂信者(笑)の様で不気味だと感じる方もあるかもしれない。なぜ、青森県の県職員と団さんがつながっているのかと不思議に思われる向きもあるかもしれない。

青森県弘前市を会場に年 2 回、団先生のワークショップを有志で自主開催するようになって 10 年を超えた。初めは児童相談所の職員中心で、教育関係者や市町村、保健師などに声をかけた。(ね、瀧本さん)練習のため家族にお願いし、交代で家族面接をビデオにとって自主勉強会を開きつつ団先生を迎える。そんながむしやらな時期を超え、徐々に家族の見立て方が肌に馴染みはじめ、ジェノグラム面接や家族描画などの技法も手に入れてきた。その間、仲間も入れ替わりながら、それでも新旧コンスタントに 20 名前後の参加者を得て継続している。参加者が減ってペイできなくなったら止めようというのが最初の約束。でも、今秋も、25 名の参加者があった。児童相談所の職員は 3 分の 1。教育関係、高齢者福祉、女性相談、医療関係などの地域の様々な対人援助関係者が名簿に並ぶ。職種も年齢も経験年数も様々だけれど、同じ時を共有し、同じ言語を持ってつながる。いつもの顔と新しい顔。研修会場に流れる前向きで和やかな空気。緩やかに、でも確実に 10 年前にはなかった繋がりが育っているのだと感じる。そんなことがちょっと素敵だと思う。

そんな事情で、団さんとつながっている。年 2 回確実に話をするチャンスがある。そこで私は、全国の児童福祉の事情や青森県の位置を知る機会を得てきた。その時々には琴線に触れることばがあった。時に自分のあり方を見直させ、時に意欲を奮い立たせ。

さて、そうやって得てきた恩恵を私はどうやって後輩に伝えていくことができるだろう。私の中に生きてきたたくさんのことばを、私の体験をくぐらせて私の実感と共に、次に渡すことを考える、そんな立場(年齢?)になってきたのかと最近思う。

## 脇野千恵

今、職場は子どもをめぐる大変な問題に取り組んでいます。まさかと思っていたことが、簡単に起こってしまったことに、こんなこともあるものなんだとつくづく思います。

時間外労働は、ひと月一人平均 101 時間となりました。私自身、職場は早々に立ち去る方なのですが、さすがにそれもできず、ゆっくり眠れないという疲労感を抱えてしまいました。授業という大事な仕事をこなしながらの対応。時間がゆっくりゆっくりとしか進みません。誰かがもうダメ！と手を挙げれば、何かが変わるかもしれませんが、そんな人は今のところいません。淡々と仕事をこなすことで、目を背けようとしているのでしょうか。この問題については、まだまだ解決には先がみえません。誰の責任？という話になると、本当に永遠に出口が見えないような気がします。

友人たちが、色々心配してくれます。今はうまく伝えられませんが、このことは、いつかどこかで、話すことができればと思っています。

## 岡田隆介

20 年以上前にはじまった「児童相談所とその近接領域における家族援助・家族療法研修会」を、来年 2 月 4、5 日に広島安芸グランドホテルで行います。(詳しくは、<http://kazoku.sitemix.jp/>)。これまで 4 回主催・共催をしましたが、それらとは違って今回は当市児相の若手が手をあげて

実現しました。彼らにそんな余力があったことに驚き、そして感激しました。

こんなときは少し離れて見守るべきだと自分に言い聞かせてはいたのですが、案の定、突っ走ってしまいました。また、いくつかの若い芽を摘んでしまったかもしれませんが、とはいえ、この国はまもなくこんなめんどくさい年寄りだらけになるのです。嫌がらず、いいライバルになりましょう。

## 竹中尚文

浄土真宗本願寺派専光寺住職

学生時代、英会話を習っていた。毎週、自己紹介をするのが課題だった。3回も話すと、ネタがなくなった。それだけ自分を語る言葉を持ち合わせていなかった。今、多忙である。自分を見失っている。私は、忙しいときに料理をするとすっきりする。先日、冷凍庫の中でパンチェッタを見つけた。久しぶりに、カルボナーラを作った。タイミングがすべてである。久しぶりのカルボナーラは失敗だった。3日間作り続けて、ようやく3回目になると気分がいい料理ができた。

## 川崎二三彦

物体がいきなり、A地点からB地点に動く。「ええっ、どうして？」たったそれだけのことで驚いたのは、果たしていつの頃だったろうか。

私が勤務する子どもの虹情報研修センターでは、毎日のように専門研修が行われていて、それはたくさん講師がやって来る。そして今や、ほとんどの人がパワーポイントを使用するので、私は専門的な内容にはついていけずとも、パワーポイントで映し出されるスライドには、漠然とながら目を向けていたのである。すると、講師の中にはスライド作成に結構凝っている人もあって、「へえっ」と思うようなこともある。先に述べた物体の移動もその一つだ。

だから、パワーポイントが出回り始めた頃は「こんなもの、子ども騙しに過ぎない」と馬鹿にしていたのに、気づいてみると、私もいつの間にか見よう見まねで使い始め、今ではスライド上でジェノグラムを作

図するのが私の自慢になった。男女が交際を始めて結婚し、子どもが生まれ、離婚し、再婚し、同居家族が変化する。こんな過程をを時系列で次々にスライド上で動かしていくと、単に紙の上に図示されたものを見るのと比べて、家族の動向が格段によくわかる。それまでは気づかなかったことを、スライドに描いていく中で発見し、驚かされたこともある。

ただし、この作業の難点は時間がかかること。スライド1枚1枚をにらみ、なんだかんだと手を加えていくと、いつのまにか膨大な時間を費消している。特に11月は厚生労働省が決めた児童虐待防止推進月間。各地で啓発事業が催され、私もそれらのいくつかに協力することになってパワーポイント資料の作成に忙殺されたため、とにかく時間を奪われてしまった。おかげで、本誌の連載原稿もメ切に間に合わず、2日と7時間遅れてやっと編集長に届けたのであった。

「なんだ、要するに原稿が書けなかったことの言い訳じゃないか」「えっ、バレてしまいました？」すみません、そのとおりでした。ここに伏してお詫びいたします。

## 早樫一男

これまで続けていたことは継続しつつ、4月からの新しい環境での仕事や頼まれごとをこなしていくうちに、あっという間に一年が終わります。新しい年も、もちろん、家族と関わっていきます。家族にまつわる出来事は実に多様で、奥が深いものですから...

## 西川友里

先日開催された対人援助学会に参加させていただきました。

マガジンのワークショップでは、同じグループになった執筆者の方に「すみません、さんの書いてらっしゃるもの、しっかり覚えてないんです...」と恐縮しつつ言うと、「あ～、全部一気には読めませんよね」「1つ1つが濃い上に、めっちゃボリュームありますもん」「ちょっとずつ、つまみ食いみたいに読んで、全部読みきる頃に次号発行！って感じですよ」とおっしゃ

っていました。...ですよええ！やっぱりみんなそうなんだ！と思いました。(いや、ただ単にフォローしていただいただけかもしれませんが(^\_^;)編集長の団先生いわく、マガジンはいずれ電話帳サイズの分厚さを目指すとのこと。ますます全体が把握できなくなります(笑)

基調講演の秦政氏のお話を聞いて、面白いなぁと思う反面、後半に行くにつれてじわじわと不安が...「...ヤバい。これ、今書いてる(今号分の)マガジン原稿と内容カブってるやん。」帰ってから慌てて見直しました。

今回の内容については、自分なりの答えが見つかりつつあります。もうちょっと整理して、いずれははっきりとした形にしたいと考えています。

## 中島弘美

大阪にあるCONカウンセリングオフィス  
中島です。

しばらくオフィスでの勉強会を開講していませんでしたが、ご要望が多かった家族支援講座を2012年から再開します。

対象者は現場で支援にかかわっている人限定です。まずは、これまで講座受講歴のある方を優先させていただき、これまでに温めていた内容をお伝えします。いわばバージョンアップ講座です。

春からは入門基礎コースも合わせて開講予定です。

このところ、現場実践者を対象とする研修講座をお引き受けしていると、私からみなさんに伝えたいことが多くあるにもかかわらず、研修時間だけでは消化できません、もっと時間があればさらにポイントを伝えられるのにと、もどかしい思いをしています。その未消化の内容をぜひ勉強会で伝えたいと思っています。

## 千葉晃央

秋田生まれの大阪育ちで京都に住む私はこれまで、関西から秋田へ何度移動しただろう。

移動手段としては、寝台特急「日本海」(大阪 青森間運行)が一番安い。先日乗車した、その日に廃止の方向であるこ

とが新聞で報道された。最大1日4本あった日本海も今は1本に減ってきてはいた。秋田の新聞ではカラー写真を交えての紙面であった。乗車中の車内でも、そんなタイムリーな日に乗り合わせた乗客たちなので、この話題もきこえてきて、青森では廃止反対運動の動きがあるそうだ。東北地方から関西に来るには、飛行機、新幹線乗継なら、この「日本海」よりも1万円以上高い。東北(山形、秋田、青森たぶん)では学生の修学旅行で京都に来る時に、広く利用されてきた。大阪生まれで、青森でリンゴ園をしている方、秋田から妹がいる京都へ行く方と、なかなか会わない東北にゆかりのある関西人、関西にゆかりのある東北人と出会えて、独特の乗客の一体感が旅の道中に出てくるのが忘れられない。関西弁と東北弁、もしくはそれを併用する方言が寝台のカーテン越しにきこえてくる電車の旅も今回最後かとも思いつながらの車中であった。

今回途中、天候の影響で、「日本海」に遅れが出ると、他のダイヤが乱れないようにするため、何度も「サンダーバード」等に線路を譲った。はやさ重視、利便性重視、快適性重視の流れは、電車も、対人援助の業界も一緒かと思った。あなたはどの列車に乗りますか？日常使いの普通列車に私は乗りますね。時間もそこそこ、揺れも少々ございます。

## 三野宏治

### 初めての体験1

パッチ、ステテコ、タイツ。これらの衣類を拒否し続けてきました。「そんなものはオジサンのアイテムだ」などと思っていました。この原稿を書いているのは11月20日なのですが、秋田では雪が降りだしています。そして、ついに私はパッチを履くことを決意し、先日パッチユーザーになったことを告白します。まあ、随分前から年齢的にも見た目にも間違いなくオジサンであったのですが、精神的にもそれらを受容できました。ネットで安く見つけて購入したのですが、そこには「メンズレギンス」と書いてありました。どう名付けようとパッチはパッチです。

### 初めての体験2

近所に新しい温泉施設が出来ました。これまでも車で10 - 15分も走ればいくつも温泉がありましたが見物がてら行って来ました。400円と若干高いので(多くは250 - 300円)元を取ろうと長く湯につかったところのぼせてしまいました。脱衣所でひっくり返って、冷汗は出てくるは体は冷めるは大変でした。やっとの思いで帰り、汗を流し冷えた体を温めるために風呂に入りました。温泉から帰ってきてまず風呂に入る。そんな新しいライフスタイルを実践しています。

### 初めての体験3

家の裏は畑です。そこに野生キジがいます。毎朝、大きな声で鳴きます。引越してきた頃は何の音かわかりませんでした。ある日ツガイで飛び立つ姿を見ました。キジを見たその日にゼミがあり、学生にキジのことを話しましたが少し呆れた調子で「普通にいますよ」と言われました。それどころか「カモシカとかもいますよ」と言われました。

まだカモシカは見えていませんが、白鳥がV字編隊を組んで飛ぶ姿を見ました。また呆れられても嫌なので「白鳥をみたよ」と平然を装って言ったら「もうすぐ冬ですね。スノーダンプとか買いましたか?」と言われました。一体何なんだ「スノーダンプ」って。学生から教わること(私が知らないこと)は多いのです。

## 浦田雅夫

楽しみにしていた対人援助学会に行けず。いつもお世話になっている、ほっとはあとセンターの生田一郎さんのお話も聞きたかったのですが…。とにかくバタバタと落ち着かない秋の夜長。アートミーツケア学会のホスト校裏方。学会を裏から支えるのは大変だと、はじめて気づきました。と同時に原稿の締め切りにも気づき…。編集長、ご迷惑をおかけしました。

## 中村 正

### 至福の時

京都市の二条駅近くにある立命館大学朱雀キャンパスで「シネマで学ぶ人間と

社会」というシリーズ企画を運営している。映画と対談と茶話会をセットにしたものだ。現在進行中のものは「一粒の価値 - 珈琲が映す世界と人間」である。2011年11月はジム・ジャーミッシュ監督の『コーヒー & シガレッツ』(2003年作品)を取り上げた。招いたゲストは京都の老舗「小川珈琲」のバリスタチャンピオン(イタリア語でbarista、珈琲を淹れる職業人の呼称)の岡田さん。イケメンである。

この映画はテーブルを挟んだ会話風景だけの11篇の短編を集めた作品。コーヒーカップと灰皿の置かれたテーブルと会話がメインのオムニバス。白黒の画面構成が印象深い。

第1話は「変な出会い」。コーヒーを何杯も注文し煙草に次々に火をつける男と、そこにやってきた少し若い男とのやりとりを描いている。ふたりは待ち合わせをしていたらしいが、明らかに初対面である。やたらと興奮している中年男は意味のない挨拶を何度も繰り返す。どうにも落ち着かない。若い方もそれに應對して会話を続けようとするがかみ合わない。コーヒーカップを握ったり席を替えてはまた戻ったりと意味のないことを繰り返す。最後に若い男が歯医者に行くのを億劫がっているの、では俺が代わりに行ってくるといい診察券をもらい出かけていく。一件落着。いったい何だったのかわからないがすべてはうまく収まった。何の目的の待ち合わせだったのか、男がなぜあれほど興奮しているのか、説明はいっさいない。

第7話は「いとこ」である。世界的な女優と売れない歌手のいとこ同士の会話で、売れない歌手がちくちくと嫌味と皮肉をいう。心理ドラマとしてもなかなか秀逸である。この二人はケイト・ブラッシュェットという女優のひとり二役である。ひとりのなかに宿る二面性がうまく描かれている。

第9話も「いとこ」。人気を博しているイギリス人俳優を売れない俳優が会いたいと申し出て会話を始めたロサンジェルスのカフェ。実はお互いは遠い先祖でつながりたいとこ同士であることを発見したといい、うさんくさそうな家系図を持ち出し説明しだす。かなり強引である。初対面のイ

ギリス人俳優は相手がなにを言い出すのかと思い、おどおどと対応する様子が面白い。強引に電話番号を教えてくれという。いや、電話は教えない主義なのだと言有名な俳優は断る。その途中に有名な映画監督からその強引な男に電話がかかる。その友人と分かったとたん態度を変える俳優の豹変振りが面白い。二人の軽妙な駆け引きのキャッチボールが心地よい。

第 10 話は「幻覚」。ビル・マーレー（「ゴーストバスターズ」）と、ヒップホップ歌手であるウータンクランの二人との無意味な会話である。歌手のひとりが実は漢方の医者でドリルを使った手術もやるのだと話す。ビル・マーレーが本人のままウエーターで登場。コーヒーをポットから直接飲んだり、煙草にガスの点火スイッチから火をつけたりする。ばかばかしい3人の会話だ。

最後の第 11 話は「シャンパン」。暗い倉庫のようなセットで年寄りが二人テーブルに付いている。倉庫番らしい二人はランチを終えて、休み時間のつかの間、コーヒーを飲んでいる。

「テイラー？ どうした？」

「うん」

「大丈夫か？」

「いや、-----。世間から置き去りにされたような気分だ。」

「-----」

「マーレーの曲を知っているかい。」

『世の中から忘れ去られ』。きれいな曲だ。』（BGMとしてのこの曲が流れている）

「このまずいコーヒーをシャンパンと思って、乾杯しようじゃないか」

「何に？」

「1920 年代のパリに。ジョセフィン・ペカー、ムーラン・ルージュに。」

「それと 1970 年代のニューヨーク、それも 70 年代後半のニューヨークに。」

「コーヒーと煙草だけのランチは健康によくないよ。」

「ランチは食べたじゃないか。休憩で戻ってきたところだ。」

「え、そうだったかい。休憩は何分だい？」

「10 分さ」

「-----。嘘だと言ってくれ。」

「-----」

「さあ。頼むから嘘だと言ってくれ。」

「なにが」

「-----。いい、もういいんだ。昼寝するから、休憩が終わったら起こしてくれ。」

「あと 2 分もないぞ」

「-----」（もう寝ている）

「テイラー？」

「-----」（深い眠りに入っている）

テイラー老人は果たして再び目覚めるのか。静寂な死を予感させる。なんら悲しくはない。永眠という言葉が相応しい情景描写である。

いつもあたりまえのようにしてコーヒーをカフェでいただく。お隣の会話がこんな具合に聞こえてきそう。バカバカしい会話、喧嘩のような会話、一人でもの思いにふける自分との会話、やっぱり街にはカフェが欠かせない。小川珈琲の岡田さんと映画後の対談はステージにテーブルと灰皿とコーヒーカップを置いてすすめた。映画の第 12 話のように演出した。第 13 話、第 14 話と続くように、みなさんもこれからカフェにいらしてください。好きな映画を企画し、楽しい相手を招いて対話し（目標は黒柳徹子さんの「徹子の部屋」だ）、その後ロビーでおいしい珈琲を手におしゃべりする、土曜の午後の至福の時である。

\*\*\*\*\* シネマ企画は \*\*\*\*\*  
<http://www.ritsumeihuman.com/cinema/>  
をご覧ください。是非、おこしください。

## サトウタツヤ

11 月 21 日（月）、科研費・新学術領域「法と人間科学」に関する会合が龍谷大学であり、翌日からイタリア・サレント大学のサルバトーレ先生を招聘教授に迎えた後、25 日（金）には日本 ALS 協会の橋本操さんに授業のゲストに来ていただき（学生には多大のインパクト）、その日のうちに広島へ。日本質的心理学会後には、29 日からクラーク大学の Valsiner 教授のところ短期訪問。こういうことをしているのかと自問しなくもないですが、こういうことが出来るのもいろんな意味で今しかないだろうと思いき直る

ことにしました。

さて、私は文章を書くのが得意な方とってきたのですが、そういう自覚を捨てねばならないようです。あるいは、「難しい文章」と「気楽な文章」という二分法をやめて、常に真摯に文章を書くようにするか。そもそも、依頼された文章を全て引き受けるのが無理の始まりと自覚を持つべきか。



いずれにせよ、毎回このエッセイ提出が締め切りに遅れて申し訳ないです。今回は、アメリカ・マサチューセッツ州、クラーク大学で書いてます。リスが冬眠を前に一生懸命エサをほおぼっているのが見えます。2/3の夜、サティアとヨハンナのご夫妻と共に、ウースターのお寿司屋さん（ババスシ）でお寿司を食べました。こういう記述は「ギリギリの覚悟をもった固有名の記述」からはほど遠いなあ。

## 大野 睦

大阪生まれ。日本福祉大学社会福祉学部卒業。屋久島でネイチャーガイドという職を通して多くの方とネイティブ（自然や人が持つ本来の）ビジョン（視点や考え方）を共有したいとエコツアー会社、有限会社ネイティブビジョン設立。  
BLOG やくしまに暮らして

<http://mutsumi-ohno.seesaa.net>

12 月だというのに、気温 20 で快晴。今日からロケに入ります。撮影日和！

## 坊 隆史

ふと、家を買おうと思いました。交通や買い物が便利なちょっとハイソなマンションです。友人の身内の一級建築士の方とも相談し、わりと真剣に検討しました。友人には「賃貸は家賃を払うのが勿体なくて」と説明しましたが、自分の社会的・経済的信用がどこまであるのかを試したい気持ちもありました。ところが結果はロー

ン審査で惨敗。過去の収入、現在の職場および職種で判断されたそうです。収入は仕方ないとして、職種について理解してもらえなかったことは辛かった。これが対人援助職に対する世間の評価なのか？なんだか社会人としての自分を否定された気持ちになりました。営業さんからは別の方法を提案してもらいましたが意気消沈してしまい、今回はフェードアウト。援助者としても社会人としてもまだまだ未熟だと痛感しました。購入をお願いされるようになるくらい精進あるのみです。

## 松本健輔

カウンセリングルームHummingBird 主宰  
<http://www.hummingbird-cr.com>

父息子の関係とはほんとうに難しいものです。最近友だちが毎日のように父親と喧嘩をするという話しをしていました。感謝の思いはあるけど、つい口を開くと思っていることと逆のことを言ってしまう。

僕自身もまた当事者です。上手くコミュニケーションが取れない。単純な話しなかな素直になれない。

援助者としていろいろなことを勉強し、いろいろな話しを聞き、こうしたらいいということは頭では分かっているけどなかなか出来ない。むしろ逆のことをしてしまう。ほんとうに人って難しいなと思います。

よく考えてみたら本当に親不孝をしてきたもんだと思います。大学在籍中にいきなり海外に行きたいと飛び出して、大学卒業したら就職してくれるかと思ったら大学院に進学し、卒業後専門職になるとしたら一度社会が見たいと営業の仕事をする。そうしたかと思えば、突然仕事を辞めて独立。保守的な父親にとっては理解のできない生き方に見えているのだと思います。ほんとうは一つ一つしっかり思いを説明して分かってもらう必要があったことです。でも、なかなかそれを分かってもらうために言葉を伝えられずにここまで来てしまいました。

そんな先日、一通のメールを送りました。内容は恥ずかしくて省略しますが、「感謝しています」ということと、「親孝行したいという気持ちはある」という内容です。親孝

行したい時には親はなしとはいいますが、そうならないための小さな一歩です。少しでも届いてくれていればいいのですが。

## 団士郎

2011年秋、私にとっての巨星が二つおちた。

立川談志が亡くなった。高校三年生の秋頃だったろうか、三一新書「現代落語論」に揺さぶられ、心底凄と思った。それ以来、心の中で自分は、立川団士郎だと思っていた。あれ以来四十七年、常に頭のどこかに談志がいた。二度、弟子になりたいと思ったことがある。二度目に思った時は、立川流の一般弟子になら、なれないこともなさそうだった。でも、やっぱり…とためらった。

それには理由がある。高座、独演会など、何度か生の舞台を見て、DVDやCDも持っているにもかかわらず、やっぱり私には談志落語が合わなかった。もっといえば、立川談志には大いに関心があるのに、談志落語への思い入れが、どうしても同じほどには持てなかった。わざわざ浅草演芸場をのぞいたこともある。志ん生のLPはどさっとあるし、志ん朝、小三治のDVDセットだって、圓生落語全集だって持っている。

長年の友人に桂南光さんがいて、独演会にも機会があると出かける。落語雑誌や書籍も多く読んでいる。なのに、落語が一番面白いと思えない。いったいこれはどうした事かと、我ながら解せない。

ただ、無理におもしろいフリはすまいと心に決めて今に至る。これこそ立川談志に教わったことだと思う。世の中の何かに合わせて、なぞるように楽しむのではなく、自分で切り開いた面白さを見つける。そうしていると、やっぱりオーソックス、スタンダードは凄いモノであることが分かる。

思いつきやまねごと、流行なんかではない、本当の藝、ワザに近づくことだ。

そんなことを一生かけて談志師匠から、今後も学び続けるのかもしれないと思う。

辻悟先生が亡くなった。治療精神医学を謳うロールシャッハ阪大法の中核にあった恩師だ。

私は辻先生に会う頃まで、いろんな事を見よう見まねで、それなりに出来る人間だった。それで殊更不都合もなかったが、自分自身には信用のならなさを自覚していた。時間をかけて、じっくり学んだ経験の欠如が理由だと思っていた。

学校での学びは、生徒一人一人に関心などなくどんどん進み、合格点だけが目安の世界に思えた。

仕事を始めて数年経ってから、自ら選んで通い始めた講座で辻先生にあった。冗談も言わず、論理的に詰める話法は怖かった。それまで、こういう先生に会ったことがなかった。それから数年間、自分としてはよく学んだと思える経験をした。

そしてある日、突然、腑に落ちて世界が見える経験を、ロールシャッハテストの学びの中でした。それが起きると、自分の中にある他の物事のあちらこちらでも、なるほど、そうだったのかという合点の連続が発生した。心理検査の肝なんて、このときにみんなスルスルと解けた。

個人の自信のある、なしは、こういう経験の有無にかかっているのだらうと思う。その道筋に連れて行ってくれた恩師だと思える人に出会える幸運は、あちこちに転がっているものではないのかもしれない。

あそこで学ばせて貰ったのは、固定した知識ではなく、どんどん進化する仕組みを把握する枠だったことに、後になって気付いた。そしてそれは、いつまでも消えることはない。

ありがとうございました辻先生。自分の出来ることを、続けられる限り頑張ります。弟子 団士郎。

